
間違い

ももきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間違い

【Zマーク】

Z3510M

【作者名】

ももきち

【あらすじ】

おとぎ話のような感覚で書いた、悲劇の短編小説です。

けつこう短いので、暇なときに気軽に読んでいただけると嬉しいです。

むかしむかし、あるところに、一人の少年がいた。

少年は幼い頃に両親を亡くし、妹と二人暮らしをしている。

少年はよく働き、全力で妹を育て、護ってきた。

そして妹は、そんな優しい兄に恋をした。妹として兄を愛する気持ちを通り越して、恋心を抱いていた。

しかし少年には可愛い恋人がいた。彼女は、まるで太陽のように明るく笑う、魅力的な少女だった。その少女が笑うと、誰もが幸せになれた。

少年はその少女をとても大切にしていた。心から愛していた。そして少女もまた、少年のことを心から愛していた。この一人はいつも幸せだった。

少年はもちろん、妹を見離したわけではない。でも、彼は妹の気持ちを知つていながらも知らないふりをして、時間さえあればいつもあの少女に会いに行つた。

とうとう、嫉妬を抑えられなくなつた哀れな妹は、ある日、兄を装つた手紙で少女を森に呼び出した。妹の手には鋭い短刀。どうしても兄を手に入れたかった。

そのとき少年はちょうど、起きたばかりだった。仕事のない朝なのでいつもより少し寝坊をしていた。

そのとき、彼は妹が家にいないことに気付いて窓の外を見た。

「水やりでもしているのかな」

彼は窓から、森に向かつて歩く妹が見えた。その手には短刀が握られている。

不審に思つて妹の向かう先を見ると、そこには少年が心から愛する美しい少女の後ろ姿。少年はすべてを理解し、反射的にピストル

を持って、急いで外に出た。

妹が短刀を振りかざし、可憐な少女に襲いかかる。

気付いた少女が悲鳴を上げる。

少年は狙いを定めてピストルの引き金を引いた。

妹は銃声とともに崩れ落ちた。

少年に気付いた美しい少女は、状況を理解して、悲しげに目を伏せた。そして歩いてきた少年に抱きつき、ひたすら泣きじゃくった。「ごめんなさい、ごめんなさい……わたしなんかのために、あなたの大切な妹さんを……本当にごめんなさい」

少女は少年にしがみついたまま、ただひたすらに謝った。少年は無言で宙を見つめていた。

「わたし、妹さんの気持ちは知っていたのよ。でもわたしはあなたといるのが楽しくて……ごめんなさい、こんなことになるとは思わなかつた。」

ただ罪悪感に苦しみ、涙を流し続ける少女を見て、少年はこう言った。

「どうか、僕は間違つたことをしたな。」

少女は顔を上げ、少年の目を見つめた。口を開いたが、言葉にならなかつた。

「僕は君のことを見つめ、世界で一番愛していた。妹よりも大切だつた。もちろん今だつてそうだ。」

そう言つ少年の目は虚ろだつた。

「それなのに僕は今、君に辛い思いをさせている。君はこれからずっと、これを背負つて生きていくんだろう?」

「だって、わたしが悪いんだもの。あなたを独り占めしようとしたわたしが。それくらい背負つて当然だわ。」

少女は嗚咽を我慢して、悲しそうに少しだけ笑つた。

それでも少年は表情ひとつ変えず、なにも聞かなかつたかのよう
に、もう一度言つた。

「僕は間違つたことをした。ごめん」

少年は少女の手をほどき、少し離れたところに立つた。

そしてピストルを、世界でいちばん愛する少女に向けた。

少女はおびえた目で少年を見上げた。

「やめて、何をするの・・・？」

「この僕を見てわからないか？・・・君を殺すのさ」

少年は笑つた。しかし、声も、ピストルを握つた手も震えていた。

「愛してるよ、永遠に」

銃声が鳴り響いた。美しい少女はゆっくり倒れこみ、動かなくな
つた。

ピストルを握る少年の手に、涙が落ちた。

「あんなに愛していたのに・・・こんなに愛しているの」

少年はしゃがみこみ、さつきまで恋人だった、愛しい少女の掌てのひらを

自分の頬に当てた。少年の涙は彼女の白い手も濡らした。

少年は妹の亡骸のそばに、光るものを見つけた。妹が少女を殺す
予定だつた短刀だ。

少年は手を伸ばしてその短刀を取り、そのまま自分の首を切
つた。

だんだん意識が遠のき、視界がぼやけて見えた。

少年は、可愛い少女の顔をそっと持ち上げ、最後のキスをして、
彼女の細い体を抱きしめた。

「・・・僕は、間違つたことをした。」

三度目の台詞を呟いて、彼は眠るように目を閉じた。

(後書き)

どうでしたか？

少しでも、気に入つていただけたら嬉しいです。

暗い話で失礼いたしました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3510m/>

間違い

2010年10月9日22時28分発行